

Becmu № 64

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部露語露文コース室

tel: 03-5286-3740

e-mail: robun@list.waseda.jp

<https://dpt-bun-russia.w.waseda.jp/>

- 会員の近況より
カザフスタン留学記
2025 年度春季公開講演会 傍聴記
- 会員の新刊情報
- 早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い
- 学会だより
- 2025 年度秋季公開講演会のお知らせ

江川柚稀
西角美咲

会員の近況より

今号では、カザフ国立大学に留学し、2024 年 9 月から 2025 年 6 月にかけてカザフスタンに滞在した露語露文コース 4 年生の江川柚稀さんに留学体験記を、また、2025 年 6 月 28 日に開催された春季公開講演会（林愛子氏「私の『在外』お仕事外観：キルギス、ウクライナで働く」）の傍聴記を大学院博士課程の西角美咲さんに寄せていただきました。

* * * * *

カザフスタン留学記

江川柚稀

私が初めてカザフスタンという国を知ったのはいつだろうか。高校生の時、地理の授業で中央アジアの国々とその首都を暗記するように強いられ、世界史の授業で中央アジアの歴史を体系的に理解できなかったことは覚えている。多くの受験生にとって、遊牧民の地である中央アジア・北アジアの地の歴史はウィークポイントである。同様に、多くの日本人にとってカザフスタンがどのような国であるのかイメージが湧かないのも無理もないだろう。また、遠く離れた国に住むカザフ人が我々と似たモンゴロイドの容貌をしていることに意外さを感じる人も多いだろう。しかし、見た目が似ていても文化面はまったく異なる国である。

カザフ人は元々、移動式の生活を営む遊牧民であり、ソ連時代に定住を始めた。今でもロシア・ソビエト文化が色濃く残る。言語の面でも殆どの住民がチュルク語族のカザフ語とインド・ヨーロッパ語族であるロシア語のバイリンガルである。主要民族であるカザフ

人の他にはロシア系（約2割）や他にも多くの民族が住み、文化やアイデンティティは多様である。それ故に、カザフスタンがどのような国かと問われると、返答に困ることが少なくない。しかし、この多様性こそがカザフスタンの最も大きな特徴である。ある人々にとってカザフスタンはかつて存在したカザフ・ハン国の後継国であり、またある人々にとってはソビエト連邦の後継国であるのかもしれない。帝国の遺産とカザフ文化の融合は、多くの日本人にとってユニークに感じられるだろう。

私はカザフスタンの旧都であるアルマトイのカザフ国立大学準備学部で約9か月ほど学んだ。準備学部とは本科である学部に入学する為の学部であるが、留学生も多く学んでいる。私のクラスは日本人・トルクメニスタン人・フィリピン人・中国人・カザフ人など多様な民族構成であった。このクラスは授業レベルが高く、秋学期はB1、春学期はB2レベルを基準にして行われた。中でも旧ソ連のトルクメニスタンから来た学生は非常に流暢なロシア語を話した。授業は週に6日ほど行われ、かなりハードなスケジュールであった。科目はロシア語・カザフ語・マスメディア・カザフスタンの歴史・コミュニケーションであり、カザフ語の授業ではロシア語を使ってカザフ語を理解する必要があり、困難を感じることも多かった。マスメディアの授業では政治に関係する語彙や表現を多く学び、授業内では言論の自由が保障され意見交換をする機会に恵まれた。特に中国から来た学生の雄弁さには驚かされることが多かった。帰国後にはロシア語のマスメディアを大方理解できるようになった。テストは *контрольная работа* と学期末にある *сессия* と呼ばれるものがあり、日本の試験と異なり口頭試問形式を取ることが多く、試験の難易度は授業レベルよりも易しく設定されていた。

授業は基本的に午前中であり、午後は友人と食事に出かけることが多かった。大学付近のレストランや食堂では、カザフ料理だけではなくロシア、コーカサス料理なども充実している。アルマトイでは物価が急上昇しているとはいえ、日本の三分の二程度の値段でランチを食べられる。また、スーパーでは手頃な価格で総菜を買うことができるが、品質管理は日本ほど徹底されておらず、食中毒で入院したため自炊を始めることにした。昼食後は友達と別れ、しばしば教会へと出かけた。アルマトイは帝政ロシアの軍事要塞として始まり、かつてはロシア風の *Верный* という名で呼ばれており、現在でも数多くの正教会が存在する。教会の内部は乳香と蝋燭の独特の香りが入り混じり、きまつて薄暗かった。私はこの香りと静けさが気に入り、気づけば何度も長い時間を過ごしていた。教会から帰る頃には日が暮れていることが多かったが、一度も危険な目にあったことはなかった。一般にアルマトイは治安が良いと言われているが、必ずしも安全であると言い切れず、個人の属性による部分もある。しかし、人間よりも危険なのは野犬であり、私は彼らと幾度も戦いを繰り広げた。渡航前には狂犬病のワクチンを接種することを推奨する。

アルマトイは典型的な旧ソ連の都市で、格子状に設計され、広大な中央広場や公園、文化施設がセットになっている。公園では国家レベルのイベントがしばしば祝われる。中でも重要な記念日はナウルズ、独立記念日、戦勝記念日である。ナウルズはイラン発祥のイベントで、寒さが和らぎ始める頃、春分の日に春の訪到来を祝う行事である。独立記念日は1991年のソビエト連邦からの独立を記念した日である。戦勝記念日はソビエト連邦がナチスドイツに勝利を宣言した日であり、5月9日にはパンフィロフ戦士公園で盛大に祝われ、『День победы』や『Нам нужна одна победа』などの有名な軍歌が演奏された。大祖国戦争（独ソ戦）はカザフ人とロシア人共通の記憶であり、このような脱民族化された

愛国主義はこの多民族空間である旧ソ連圏において極めて重要な意味を持っている。

(ロシア語ロシア文学コース4年生)

2025年度春季公開講演会

林愛子氏「私の『在外』お仕事概観：キルギス、ウクライナで働く」傍聴記

西角美咲

2025年6月28日、早稲田大学ロシア文学会春季公開講演会にて、林愛子氏による講演「私の『在外』お仕事概観：キルギス、ウクライナで働く」が行われた。講演では、キルギスとウクライナの近況や文化的特徴を知ることができ、氏の積み上げたキャリアに裏打ちされた、数多くの示唆を得られた。また、質疑応答も盛んに行われた。本稿では、質疑応答を含めた講演の内容を、順を追って振り返る。

林愛子氏は19世紀ロシア文学を研究し、2018年に早稲田大学文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程を修了した。その後、氏は在外公館派遣員として、2020年までキルギスの日本大使館で勤務した。大使館ではロシア語を活かし、事務を担当した。氏によれば、キルギスは「ロシア語が通じるロシアでない場所」で、驚きの多い土地であった。日本の援助への感謝を聞くこともあったという。氏の目には、キルギスが刻一刻と発展する、エネルギーッシュな場所に映っていた。

その後、氏は在外公館専門調査員として、ウクライナのキーウに勤務地を移した。氏は日本でのプロモーションや留学に係る業務など、対ウクライナ広報に勤しんだ。しかしこの時期はコロナウイルスが猛威を振るい始めた時期であり、氏の業務にも大きな影響があった。イレギュラーな事態が多く、もどかしい思いを何度も経験したという。また、2022年2月24日に始まるロシアの侵攻を受けて、氏を含めた職員らはウクライナからの退避を余儀なくされた。氏は一時帰国を挟み、ポーランド南東部のジェシュフに移動した。ジェシュフではホテルの一室を拠点とし、日本大使館の連絡事務所として活用したという。氏は情報収集や外務省との調整業務に勤しむ中で、最前線で活躍する外交官らの姿を見た。そして同時に、ロシア文化を学んできた自分自身と向き合うことにもなった。たとえロシアの文化に親しみがあっても、侵攻は決して容認されない行為である。氏は言葉にできない思いを抱えつつ、これまでの経験の中で学んだ知識や視点を生かし、それらを社会へ還元しようと邁進した。

キルギス、ウクライナでの勤務を経験した後、氏は日本へ戻り、現在はJICA中央アジア・コーカサス専門嘱託員として勤務している。氏はキルギス・カザフスタン・タジキスタンなどへの、電力・運輸・交通といった多岐にわたるODAの実施に関する業務を担っている。キルギスでの勤務時は現地の課題を現地目線で見ることが多かったが、現在では日本との関係も考えながら、より巨視的な視点で課題を見る 것도できるようになったという。

本講演会では聴衆からたくさんの質問が提起された。それらは氏の経験やキャリアに関するものと、キルギスやウクライナの現地情報に関するものの二種類に大別される。

氏は第二外国語の授業がきっかけでロシア語を学び始め、ロシアの思想史に興味を持ち、露文を選択した。文学を研究し、文学的な表現の語彙は増えても、日常で使用する物品の名前が分からぬことがあると氏は語る。ロシア語学習においては、こうして分からぬ部分を潰していくのが着実だと氏は述べる。現在、氏は業務で英語を使用する機会が多く、会議

が英語で行われることもあるそうだ。一方で、内輪の会話でロシア語を使用することもあるという。

氏は、キルギスまたウクライナの特徴および日本との関係について、次のように語った。キルギスにおいて、日本は技術立国というイメージを持たれている。最近は宗教への回帰がみられ、イスラム文化の一環としてラマダンも行われているが、禁酒を徹底するのは一部の層に限られている。ウクライナは自国への誇りを持つ人々が多く、自らのアイデンティティを大切にしている。対日感情は良く、アニメ好きの人々も多い。ロシアによる侵攻後は、公共の場でロシア語を話すことを意識的に避ける人も増えたが、ロシア語話者への迫害は氏の目線では感じられなかったという。

筆者にとって印象的だったのは、どんな状況に置かれても、氏が自分の経験や学びを生かしながら乗り越えていく様子である。特にロシアによるウクライナ侵攻を、氏は筆者よりもずっと近くで目の当たりにしており、生活にも多大な影響が及んだことが窺えた。その中で、氏は業務のみならず自らとも真摯に向き合い、それを糧としている。こうした前向きかつ建設的な姿勢に我々が学ぶことは多い。たとえどのような立場に置かれようとも、こうした姿勢がより良い未来を切り開くための礎になることは間違いない。本講演会は、貴重な現地情報を得られるのみならず、氏の生きる姿勢に触れられる、またとない機会であった。

(大学院ロシア語ロシア文化コース博士後期課程3年)

2025年下半期会員の新刊情報（2025年12月5日調べ）

- 五木寛之著『五木寛之傑作対談集 II』平凡社（2025/08）
五木寛之著『あきらめる力』宝島社（2025/09）
五木寛之著『昭和の夢は夜ひらく』新潮社（2025/10）
五木寛之著『健康という病（大活字本シリーズ）』埼玉福祉会（2025/11）
上田洋子、本田晃子他著『未完の万博』ゲンロン（2025/09）
鎌田 慧著『鉄鋼産業の闇（鎌田慧セレクション6）』皓星社（2025/07）
鎌田 慧著『炭鉱の闇（鎌田慧セレクション7）』皓星社（2025/09）
鎌田 慧著『教育工場といじめ（鎌田慧セレクション8）』皓星社（2025/11）
木下豊房編著『リハチョフの回想——知の開花から肅清と飢餓へ・20世紀ロシアの代表的知識人の証言』群像社（2025/12）
ヤン・ボードアン・ド・クルトネ著、桑野隆編訳『民族の平和的共存は可能か』
ゲンロン（2025/11）
東海林さだお著『あれも食いたいこれも食いたい 丸かじりヒットパレード』
朝日新聞出版（2025/07）
東海林さだお著『ショージ君の老いてなお、ケシカラんことばかり』大和書房（2025/10）
東海林さだお著『丸ごと一冊「タンマ君」退職記念特別号』文藝春秋（2025/10）
関千枝子著『広島第二県女二年西組——原爆で死んだ級友たち』筑摩書房（2025/10）
エレーナ・コスチュシェンコ著、高柳聰子訳『私の愛するロシア プーチン政権から忘れられた人びと』エトセトラブックス（2025/11）

マリーナ・パレイ著、高柳聰子訳『カビリア』白水社 (2025/12)
千野栄一著『プラハの古本屋』中央公論新社 (2025/08)
ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『永遠に残るは』ハーパーコリンズ・ジャパン
(2025/08)
ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『機は熟せり』ハーパーコリンズ・ジャパン
(2025/08)
ジェフリー・アーチャー著、戸田裕之訳『消えた王冠は誰の手に ロンドン警視庁王室警護
本部』ハーパーコリンズ・ジャパン (2025/10)
三木 卓著、西本鶴介監修『井原西鶴集 21世紀による日本の古典』ポプラ社 (2025/11)
アーノルド・ローベル著、三木卓訳『Days With Frog and Toad ふたりはきょうも』
ラボ教育センター(2025/11)
村山久美子監修『リトル☆バレリーナ 涙とスマイルストーリー☆3つ』Gakken(2025/06)

著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください

早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニュースレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季・秋季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して1冊お送りするという制度です。学会誌・ニュースレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をご理解のうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの会員の方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げる次第です。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金ください。

- (1) 年会費は1年につき2,000円となります。
- (2) 維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号 00160-7-87172 加入者名 早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
- (3) 複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
- (4) 『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振替用紙の通信欄にその旨をお書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

学会だより

- 2025年6月4日（水）～6日（金）に露文コースの合宿が軽井沢セミナーハウスで行われました。
- 2025年度春季公開講演会・総会が6月28日（土）に催されました。講演会では、林愛子氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）東・中央アジア部 中央アジア・コーカサス課専門嘱託）に「私の『在外』お仕事外観：キルギス、ウクライナで働く」と題してご講演いただきました。この講演会の傍聴記はニュースレター本号に掲載されています。
- 2025年7月12日（土）に2026年度文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の推薦入学試験が行われました。合格者は2名でした。
- 2025年7月31日（木）、早大ロシア文学会春季院生研究発表会が開催され、文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程在籍者で、修士論文提出予定者1名による発表がおこなわれました。
- 2025年9月18日（木）、9月27日（土）に2026年度文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の一般入学試験が行われました。合格者は2名でした。
- 2025年度秋季公開講演会・総会が2026年1月17日（土）に催されます。詳しい日時・場所につきましては、次頁（7頁）をご覧ください。

* ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください *

* * * * *

2025年度秋季公開講演会

早稲田大学ロシア文学会では、2026年1月17日（土）に下記の要領で2025年度秋季公開講演会・総会を開催いたします。4月に著書『ロシア 女たちの反体制運動』（集英社新書）を上梓し、「新刊案内」でも示したように、最近も2冊の訳書を刊行されたロシア文学研究者・高柳聰子氏にご講演いただきます。

●講演会

日時： 2026年1月17日（土）15時00分から（16時40分終了予定）
会場： 早稲田大学戸山キャンパス36号館681教室

「国を出て国を想う——現代ロシアの亡命女性作家たち」

高柳 聰子 氏
(ロシア文学研究者、本学非常勤講師)

* 会員のみならず、一般、学生の皆様のご来場を歓迎いたします。
☆講演会終了後、懇親会も予定していますので、奮ってご参加ください。